

昨年暮れに叔父が亡くなりました。寺の次男として生まれ、経済的に困難ななか大学を出て、そのまま岐阜を離れ愛知県の小学校の教員として一生を送った叔父でした。

無事葬儀が終わり、七日毎のおまいりに毎週叔父の自宅に通う日々が始まりました。おつとめをしようとお内仏の前に座った瞬間、ハッとしました。私の目に入ったのはお内仏の前に置かれた額入りの3枚の写真でした。

それは、我が家の祖父と祖母と父の写真だったのです。叔父にとっては父と母と兄ということです。叔母の話では、叔父は毎朝起きるとこの写真に手を合わせ、また、外出する時や寝る前にも写真に向かって話し掛けながら手を合わせていたそうです。もちろん、私の家にもこの3人の写真はあるのですが、広い本堂に安置していることもあり、こんなに近くでまじまじと見たのは久しぶりでした。

叔父の自宅からは、父が亡くなって足が遠のいていたこともありましたが、今回はこの七日毎のおまいりに伺う中で、生前の叔父がいかに生まれ故郷のことを想っていたかを叔母から聞かされる機会にもなりました。生まれ育った寺のこと、父母のこと、兄のこと、共に遊んだ同級生のこと、懐かしい人たち、忘れられない風景、どれもこれも心の中で大切に想っていたのだと思います。

とかく私たちは近くにいると当たり前になってしまって、喜んだり、感謝したり、気付けなかったりすることがあります。今回私は、遠くから我が家のことを深く想ってくださっている方があったこと、そしてその想いや願いの中で暮らしていたことに気付かされました。もっと早く気付かないといけないのに、亡くならないと気付けない大切なことがあります。私にとって叔父は「深い願い」をかけてくださった、紛れもない「仏さま」だったのでした。